

# 旧約聖書ルツ記の成立時期と文学的潤色 について\*

池田 晶 (筑波大学大学院研究生)

キーワード： 聖書ヘブライ語、地域差、媒体差、時代差、文書の成立時期推定、文学的潤色

## 0 はじめに

ルツ記は旧約聖書の中でも最も短い書のひとつであるが、土地相続や結婚をはじめとする古代イスラエル法に関する問題、外国人観に関わる問題、言語学上の問題を含む。それらをもとにして本書の成立時期をめぐって様々な方法で研究が試みられてきた。それにもかかわらず成立時期に関し研究者の一致した見解が見られないのが現状である。後の節で示すように、その原因の一つとして「成立」をどのように定義づけるかが研究者によって異なることが挙げられる。

本稿では、現在の形のルツ記ができ上がった時点を成立時期と定義す

\*本稿は、2002年1月に広島大学大学院社会科学部研究科に提出した修士論文の一部に大幅な加筆修正を施したものである。本稿の草稿を2002年12月7日に京都産業大学にて行なわれた西アジア言語研究会で口頭発表し、それに若干の修正を加えた。広島大学大学院において指導教官であった木幡藤子先生、筑波大学の城生百太郎先生と池田潤先生、そして西アジア言語研究会でコメントを下された方々に感謝の意を表したい。本稿では次の略語を用いる。Gen (創世記)、Ex (出エジプト記)、Lev (レビ記)、Num (民数記)、Deu (申命記)、Josh (ヨシュア記)、Jdg (士師記)、Ru (ルツ記)、1-2 Sam (サムエル記上下)、1-2Kg (列王記上下)、1-2Chron (歴代誌上下)、Ezr (エズラ記)、Neh (ネヘミヤ記)、Esth (エステル記)、Job (ヨブ記)、Ps (詩篇)、Prov (箴言)、Qoh (コヘレト書)、Cant (雅歌)、Isa (イザヤ書)、Jer (エレミヤ書)、Ezek (エゼキエル書)、Dan (ダニエル書)、Hos (ホセア書)、Mic (ミカ書)、Zech (ゼカリヤ書)、P (祭司文書)、J (ヤハウェ資料)、E (エロヒーム資料)。翻字については、Transliterated BHS Hebrew Old Testament 2001 (Copyright (c) 2001 by Matthew Anstey) に従う。ただし、印刷上の都合からアレフとアインの記号はIPAにしたがった。また、アクセントを示す記号は削除した。

る。そして、そのヘブライ語を見ることによって成立時期について考察してみたいと思う。まず先行研究を概観し、言語学的研究が必要であることを示す。そして聖書ヘブライ語の時代区分を概観し、次に聖書ヘブライ語の時代差に着目した F. Bush のルツ記研究を紹介する。そのうえで、彼が根拠として挙げている項目の中には時代差だけでは割り切れない問題が含まれていることを指摘する。また、彼が扱っていない言語的特徴についても論じてみたいと思う。

## 1 ルツ記の先行研究

ルツ記の成立時期を推定するために、これまでに正典の中での位置、古代イスラエル法、物語の内容、そして言語的特徴等、様々な手がかりを用いて研究が進められてきた。

### 1.1 正典の中での位置の観点から

ヘブライ語聖書は三つの部分からなる。正典化された順は「律法」、「預言者」、「諸書」である。ルツ記がこの三つの部分のどこに属するかということに関して二つの伝承がある。一つは、「預言者」に属し、士師記とサムエル記の間に位置するという伝承である。これは、ルツ記の物語の時代が士師の時代に設定され士師記の続編をなしており、サムエル記への橋渡しとなっていることから理解される。もう一つは、ルツ記を士師記の続編としてではなく独立した書として扱い「諸書」に組み入れる。A. Weiser や E. Zenger などは<sup>1</sup>、最後に正典化された第三部「諸書」にルツ記が組み入れられているという事実から、ルツ記が遅い時代に成立したとする<sup>2</sup>。一方 W. Rudolph は、諸書はおおむね比較的早期の諸文書から構成されていると指摘する<sup>3</sup>。物語の成立時期と正典化の時期は別問題であるので、正典化の時期は物語の成立時期の論拠にはなりにくい。

<sup>1</sup>Weiser (1970: 361-363), Zenger (1986: 27).

<sup>2</sup>諸書の中のどこにルツ記を置くかということについても諸説がある。Weiser や Zenger の立場からみると、諸書の中における位置に諸説があるのは、それに属す書が正典化されたのが比較的遅いことが原因なのだろうか。

<sup>3</sup>Rudolph (1962: 28).

## 1.2 古代イスラエルの法習慣の観点から

ルツ記は短い物語であるが、古代イスラエルの法習慣に関するモチーフを多く含んでいる。そのため物語に出てくる法習慣を手がかりにしてルツ記の成立時期を推定する試みがなされてきた。

しかし、ルツ記に現れるこれらの法習慣は、旧約聖書中に記されている法律と明らかに齟齬がある場合もある<sup>4</sup>。したがって、たとえ旧約中の法文書の成立年代が分かったとしても、その齟齬ゆえに聖書の記述をもとにルツ記の年代を推定することは困難である。また Ru 4:7 のように、そこ以外は旧約聖書中のどこにも記されていない法習慣もみられる<sup>5</sup>。したがって、古代イスラエルの法習慣の観点から成立時期を推定することは困難である。

## 1.3 物語の内容上の観点から

ルツ記の物語の内容から成立時期を推定するときには、次のことが論拠として好んで用いられてきた。それは外国人観、特に結婚観とモアブ人との関係、士師時代を舞台にしていること、ルツ記の著者像の問題、旧約聖書中のほかの物語との関連などである。一例として外国人観を挙げてみる。

ルツ記では、モアブ人ルツがイスラエルの民に迎えられている様子が描かれている。このことから、イスラエルの民とモアブ人との間に緊張関係のなかった捕囚前に成立時期を想定する研究者もいる。また、ルツ記をユダヤ教の純血主義に対して普遍主義を訴える物語としてとらえ、捕囚後の時代に成立時期を想定する研究者もいる。したがって内容から成立時期を設定することも主観的であり<sup>6</sup>論拠となりにくい。

<sup>4</sup> 齟齬が見られるのは Deu 25:5-10 のレヴィラート婚制度、Lev 25:23-25 の贖いの制度である。

<sup>5</sup> 捕囚前に成立時期を想定した D. R. G. Beattie も捕囚後に想定した P. Joüon も、4:7 をすでに廃れていた習慣を説明したものだと解釈した (Beattie (1974: 253), Joüon (1986: 12-14))。

<sup>6</sup> Würthwein (1969: 6) によると、「その物語 (ルツ記) は特定の時代的色彩をもっていない。そういうわけで研究者の時代に関する学問的アプローチは大きく割れている。(中略) 捕囚前の時代に (ルツ記を設定することについて) 反対するものはない。他方、捕囚前に置くことも確実に証明されていない。(中略) (ルツ記は特定の時代的色彩を帯びていないので) 時代と世界のイメージを描き出すことができたのである。」(括弧内は筆者による補足説明)

#### 1.4 言語学的研究

旧約聖書の文書の一番古いと推定されているものと一番新しいものとの間には、1000年近い時代的隔りがある。しかし、それほどの時代的隔りがあるにも関わらずその言語はかなりの程度画一化されている。その一方で、文法的特徴や語彙にはバリエーションも見られ、聖書外のヘブライ語資料や近隣の同系言語との比較から聖書に痕跡をとどめるヘブライ語の時代差を客観的に論じることができる。そのような違いに着目する研究方法は、物語の内容等から成立時期を推定するよりも説得力があるのではないだろうか。ルツ記の言語的特徴から成立時期を推定した研究を概観したものとして Morris (1968) と Gordis (1974)、そして Sasson (1989) がある。本節ではこれらを中心に簡潔に研究史を概観する。

成立時期に関しては次の三つの説がある。捕囚前と捕囚後、そして両者の過渡期に想定する説である。

捕囚前に成立時期を想定した研究者の一例として、以下の研究者が挙げられる。J. M. Myers は、ルツ記の言語は族長物語およびサムエル記と類似していることに注目して成立時期を王国時代初期に設定した<sup>7</sup>。後述するように、ルツ記には古い時代の言語的特徴が多く見られるが新語法も見られる。このような事実について Myers は、新語法は後の時代の加筆だと述べた<sup>8</sup>。Beattie も<sup>9</sup>L. Morris も Myers と同様の解釈をした。E. F. Campbell も紀元前 950-700 年という早い時代に成立時期を想定した。古い時代の言語的特徴が多く見られるが新語法も見られることについて、Campbell は次のように述べている<sup>10</sup>。間違いなく遅い時代 (late date) を示す言語データはルツ記には存在しない。それに対し、多くの特徴が意識的な擬古化 (archaism) かもしれないが、何ら人工的なものはない。ルツ記の言語は王国時代の言語であり、古めかしさを帯びている<sup>11</sup>。

<sup>7</sup>Morris (1968: 235), Gordis (1974: 244, 260).

<sup>8</sup>Morris (1968: 237).

<sup>9</sup>Beattie (1974: 253).

<sup>10</sup>Campbell (1975: 26), Sasson (1989: 245).

<sup>11</sup>古めかしさの原因は、国の辺境の「文化的な遅れ cultural lag」によるものだろうと Campbell は述べた (Campbell (1975: 26), Sasson (1989: 245))。しかし、後の時代の人には古い時代の表現を程度の差こそあれ知っていて、それを模することができる。死海写本はアラム語の影響を強烈にうけていることが指摘されているが、書き手が努めて古い時代のヘブライ語を書こうと努めたことも指摘されている (Kutscher (1982: 99))。Hurvitz によると、

一方、成立時期を捕囚後に想定する研究者の多くは Joüon のように新語法を根拠としている。古い語法と新語法が混在していることについては、遅い時期の著者が擬古体を使ったと Gordis のように解釈する研究者もいる<sup>12</sup>。しかし Morris は、ルツ記の著者が物語の時代背景にあわせるために古い形を用いることはありえないと主張する<sup>13</sup>。さらに、最新の研究である Bush (1996) は上記二案を折衷するかたちで両者の過渡期に成立時期を想定している。これについては第3節で詳しく紹介する。

このように、言語的特徴に基づいた研究でも、成立時期に関して研究者の意見が分かれている。既に述べたように、その一因として「成立」の定義が研究者によって異なっていることが挙げられる。たとえば、捕囚前に成立時期を想定する研究者の中には、現在の形のルツ記の元となった版の存在を念頭に置く研究者もいる。そして、その元となった版ができた時点を成立時期だと定めた。一方、捕囚後に成立時期を想定する研究者は、現在の形のルツ記そのものが成立した時点を成立時期とみているようである。冒頭で述べたように、筆者は現在のルツ記ができあがった時点を成立時期と定義する。

## 2 聖書ヘブライ語の時代区分

聖書ヘブライ語（以下 BH）とは、紀元前 11 世紀から前 200 年頃までのヘブライ語のことである。BH に続くヘブライ語はミシュナ・ヘブライ語（以下 MH）と呼ばれ紀元後 4 世紀頃までである。以後 19 世紀末までが中世ヘブライ語、それ以降現在までが現代（イスラエルの）ヘブライ語と呼ばれる。

BH には下位区分がある。どの研究者も紀元前 586 年のバビロン捕囚を大よその目安として時期を分けているが、捕囚前のヘブライ語のうち、一部の詩文には比較的古い時代の言語的特徴が見られるとして、次のような

例えばテキスト中の「古い」要素は成立期に関する判断材料になるとは限らない。なぜならば、それが古い時代からの生き残り、後の時代でも依然使われているという可能性があり、また意図的な擬古体である可能性があり、後の時代の著者が古い時代の文書から借りてきたものと言う可能性もあるからである (1998: 146-147)。

<sup>12</sup>彼は成立時期として紀元前 450-350 年を設定している (Gordis (1974: 245, 246))。

<sup>13</sup>彼によると、そのような方法は現代ならありえるが古代の著者はそのようなことをする意図はもたないという (Morris (1968: 236))。

三分法がとられることが多い。

1. 初期聖書ヘブライ語 Early Biblical Hebrew (EBH)<sup>14</sup>
2. 標準聖書ヘブライ語 Standard Biblical Hebrew (SBH)
3. 後期聖書ヘブライ語 Late Biblical Hebrew (LBH)

この三分法は時代差のみに着目した区分法であるが、池田潤(2002)は時代差だけでなく、北部(北イスラエル)と南部(南ユダ)それぞれに口語と文語があったこと<sup>15</sup>、地域差や媒体差があったことを考慮にいれ、ヘブライ語史を立体的にとらえている。外国の登場人物に何かを発言させるとき、珍しいことばを話させて異国情緒を演出したという E. Y. Kutschcer の指摘<sup>16</sup>や、「明らかにユダ地方で書かれた文章に、北イスラエルないしはその周辺地域やその住民が登場する際には、著者が無意識にイスラエル語へのコードスイッチングを起こしたり、意図的にイスラエル語なまりで文章を書いたりする可能性がある」<sup>17</sup> という池田潤(2000a)の指摘は、話しことばと書きことばという媒体差、そして地域差を考慮にいれている。ルツ記では会話文が物語の大半を占め、またモアブとベツレヘムという二つの地域を扱っている。そのため、この立体的なヘブライ語史の枠組みはルツ記を分析する上で大きな手がかりとなりそうである。

### 3 F. Bush (1996) の概観

既に述べたように、ルツ記の言語的特徴に着目して成立時期推定を試みた最新の研究として Bush (1996) が挙げられる。

Bush は「対照または置き換え」と「分布」を手掛かりにして研究法を提示している。前者では、サムエル記・列王記と歴代誌の並行箇所のように、同一または類似の文脈を比較する<sup>18</sup>。この比較によって、SBH で使われている特定の語彙や文法文法的特徴が LBH で別の語彙や文法的特徴に

<sup>14</sup>Kutschcer のように Archaic Biblical Hebrew (ABH) と呼ぶ研究者もいる。

<sup>15</sup>EBH、SBH、LBH だけでなく IH (Israeli Hebrew : 北イスラエル地域で話されたヘブライ語)、JH (Judahite Hebrew : 南ユダ地域で話されたヘブライ語)、RH (Reunion Hebrew : 捕囚の際、北イスラエルと南ユダの民が触れ合って生まれたヘブライ語)、そして MH があった (池田潤 (2002: 2-3))。

<sup>16</sup>Kutschcer (1982: 72)。

<sup>17</sup>池田潤 (2000a: 3)。

<sup>18</sup>並行箇所での置き換えが見られる例としては、2 Sam7:12 *mamlaktô* (SBH) と 1 Chron17:11 *mal'kûtô* (LBH) がある (いずれも「彼の王国」という意味)。

置き換わっているかどうかを確認できる。後者(「分布」)はある語彙や文法的特徴が聖書中のどこに現れるかを見ることによって、それらが時代を問わず出現する特徴なのか、ある時代に限って現れるのか、あるいはある書だけに特有の特徴なのかを確認する方法である<sup>19</sup>。

このような手続きを踏まえて、Bush はルツ記に見られる言語的特徴を SBH と LBH それぞれの特徴と照らし合わせて、ルツ記が SBH と LBH のどちらに近いかを検討する。その際、ルツ記は短い書であるので、統計を取るには規模が小さく、ある言語学的特徴が 1、2 度しか出現しないという可能性があるという注意を促す<sup>20</sup>。

### 3.1 SBH の特徴

#### (1) 一人称独立代名詞

*ʔānōkī* と *ʔānī* はどちらも BH を通して見られるが、SBH では *ʔānōkī* の方が *ʔānī* よりも頻繁に見られ、LBH では *ʔānī* が *ʔānōkī* に取って代わる傾向がある。ルツ記では *ʔānōkī* 対 *ʔānī* の比が 7 対 2 である。

#### (2) *waw*-consecutive の使用頻度に関して

LBH では *waw*-consecutive の使用が減少しているが、ルツ記では書全体を通してこれが使われている。とくに *waw*-consecutive と完了形の連鎖が 15 度現れるが、これは SBH 特有のものである。

#### (3) 時を示す副詞節

*waw*-consecutive の減少にともない、前置詞+不定形または他の名詞によって時を示す副詞節の形に変化が起こった。この種の節には SBH では通常 *wayəhī* または *wəhāyā<sup>h</sup>* が先行し、LBH では通常 *wayəhī* または *wəhāyā<sup>h</sup>* は欠落している。ルツ記では常に *wayəhī* をともなう。(1:19, 3:4, 8, 13)

#### (4) 目的格の名詞を導く *kī*

BH では動詞の目的語となる節が *kī* ではなく *ʔāšer* に導かれる場合

<sup>19</sup> 例えばある特徴が遅い時代のダニエル書やエステル記、死海文書に多く見られれば、それが特定の書に特有のものであるという可能性が排除される。したがって、それが遅い時代の特徴であると認定される。

<sup>20</sup> 同じものを別の言い方で表現することもあるので、さらに出現率が低くなる可能性が高くなる (Bush (1996: 22))。

があるが、SBH ではこの用法は稀で、LBH では頻繁に出てくる<sup>21</sup>。ルツ記では *ki* に導かれる例が 6 度 (1:6, 18, 2:22, 3:11, 14, 4:9) 出現し *ʔāšer* に導かれる例はみられない。

(5) *ki* や *ʔāšer* に導かれる名詞文の語順

SBH では述語・主語の順で、LBH では主語・述語であるが、ルツ記では述語・主語の順である。(1:18, 3:11)

(6) 動詞の直接目的語を示す前置詞 *ʔt* と *l*

SBH では動詞の直接目的語を示す *ʔt* の代わりに *l* が時々用いられるが、LBH ではこの用法が著しく増えている。この用法はルツ記にはまったく見られない。

(7) ダビデの名前の表記法：不完全表記と完全表記

SBH では 780 対 4 の割合で不完全表記が多い。過渡期のエゼキエル書では 3 対 1 であり、LBH では 0 対 271 と完全表記が多い<sup>22</sup>。ルツ記では完全表記は出現せず、不完全表記が 2 度 (4:17, 22) 出現している。

(8) 「... と... の間」を意味する *bên... ûbên ...* と *bên ... l ...*

SBH では *bên ... ûbên...* が優勢で、LBH では *bên ... l ...* が多く使われるようになる。ルツ記では 1:17 に *bên ... ûbên...* が出現している。

(9) 無冠詞名詞の前での前置詞 *mîn*

通常、前置詞 *mîn* の *n* は無冠詞名詞の語頭子音と同化する。同化しない例は SBH でも散見されるが LBH ではより頻繁に出現する<sup>23</sup>。ルツ記では、前置詞 *mîn* の *n* が無冠詞名詞の語頭子音と同化している例が 21 度出現している。

(10) 二・三人称女性複数形に関する問題

二・三人称女性複数形が、男性複数形で代用されているように見え

<sup>21</sup>BH 以後の MH では *ki* は使われなくなり *š* を使う。

<sup>22</sup>サムエル記・列王記と歴代誌の並行箇所を比較すると、後者では不完全表記が完全表記に書き換えられている場合が多い。

<sup>23</sup>特にネヘミヤ書、ダニエル書、歴代誌。



る場合があるが、その一部は共通性の双数形であると考えられる<sup>24</sup>。  
ルツ記にはこの例が7回(1:8(x2), 9, 11, 13, 19, 22)出現している。

### 3.2 LBH の特徴

#### (1) 目的語となる代名詞について

BH では、目的語が代名詞の場合、次のいずれかの方法で表示される。

A. 動詞に直接、接尾代名詞をつける

B. 直接目的語を示す *?t*<sup>25</sup> に代名詞をつける

SBH では A 対 B が 2 対 1、LBH では 17 対 1 である<sup>26</sup>。ルツ記では、A が 10 例(1:21, 2:4, 13, 15, 3:13 (x3), 4:15 (x2), 16) で B はない。

#### (2) 三人称複数形の動詞と接尾代名詞

動詞が *-û* で終わる複数形で、目的語が三人称男性・女性単数のとき、SBH では通常は直接目的語を示す *?t* に代名詞がつく。一方 LBH では、代名詞はほとんど常に動詞に直接つく<sup>27</sup>。Ru 2:15 の *ʔaklîmûhâ* は LBH の特徴を示す。

#### (3) 前置詞 *?el* と *l*

両者はほぼ同じ意味で交換可能である。*?mr* とともに用いられる前置詞は SBH では *?el* 対 *l* の比が 3.25 対 1、LBH では 1 対 4.5 である。同様の傾向が *qârôb* (...に近い) にもみられる。SBH では *?el* のみ<sup>28</sup>で、LBH では両方が出現している。ルツ記では *?mr* とともに用いられる前置詞 *?el* と *l* の比が 8 対 15 であり、2:20 で *qârôb l* がみられる。

#### (4) *lqh* と *ns?* について 「結婚する」

<sup>24</sup> 旧約のなかに 43 例あり、遅い時代の書 (later works) になると減少する (G. A. Rendsburg (1980: 77, 特に n. 55))。以下のリストは Bush (1996: 24) による。early works : 24 例 (P, J, E, Jdg, 1Sam)、exilic SBH works : 4 例 (Jer, Qoh, Zech)、Ezek (過渡期) : 4 例、成立期不詳 : 6 例 (Prov, Cant)、LBH works : 0 例 (Dan, Ezr, Neh, Chron, Esth)。

<sup>25</sup> この異綴語として *?wt* がある。

<sup>26</sup> ちなみに、死海文書では A : B の比は 250 : 11 である。

<sup>27</sup> LBH では三人称女性単数目的格接尾辞は殆ど出現しない。

<sup>28</sup> Gen 45:10, Ex 12:4, Lev 21:2, 3, 25:25, Num 27:11, Deu 4:7, 13:8, 21:3, 6, 22:2, 30:14, Josh 9:16, 2Sam 19:43, 1Kg 8:46, 59.

BHにおいて *lqh* と *nsʔ* は「結婚する」という意味で用いられる。SBHでは事実上もっぱら *lqh* が用いられ、LBHでは *lqh* と *nsʔ* の両方が用いられる。ルツ記では 1:4 に *nsʔ*、4:13 に *lqh* の例がそれぞれ見られる。

(5) *qwm* のピエル「確証する」<sup>29</sup>

語根 *qwm* で「確証する」を意味するとき、SBHではもっぱらヒフィルが用いられている。LBHではピエルがとヒフィルが併用され、MHではピエル以外は事実上消滅している。ルツ記ではヒフィル(4:5, 10)とピエル(4:7)の両方が出現している。

(6) 文頭に現れる完了形

LBHでは、*waw-consecutive* が徐々に使われなくなり<sup>30</sup>、それにともなって文頭でも完了形が使われるようになった。*waw-consecutive* は死海文書ではさらに使われなくなり、MHでは完全に使われなくなっている。ルツ記では文頭で一度完了形 *wənātan* (4:7) が用いられている。

(7) *šlp nšl* 4:7 「靴を脱ぐ」

SBHでは *šlp* はもっぱら「剣を抜く」のイディオムで用いられており、「靴を脱ぐ」という意味では、*hly*<sup>31</sup> または *nšl*<sup>32</sup> が用いられる。*šlp* は遅い時代のアラム語からの借用語という可能性が大きい<sup>33</sup>。したがって、Ru 4:7 の *šlp nšl* は遅い時期の語法として確定できる。

(8) *sbr* 「待つ、期待する、希望する」

ルツ記以外で *sbr* が出現するのは、明らかにLBHの時代の書ではPs 119:166, 145:15, Esth 9:1 である<sup>34</sup>。同じ内容で時代の早いもの(Gen 49:18)と遅いもの(Ps 119:166)を比較してみると、この語がBHに

<sup>29</sup>LBHの頃のアラム語の影響の可能性も考えられる。

<sup>30</sup>*waw-consecutive* が使われなくなるのは、それが無いアラム語の影響の可能性が指摘されている。

<sup>31</sup>Deu 25:9, 10, Isa 20:2.

<sup>32</sup>Ex 3:5, Josh 5:15.

<sup>33</sup>ヘブライ語の動詞 *hly* または *nšl* はパレスチナ・タルグムにおいて、アラム語の動詞 *šlp* で訳されている。

<sup>34</sup>Bush (1996) では挙げられていないが Neh 2:13, 15 もある。

において遅い時期に出現したことがわかる。この語根はアラム語のテキストで同じ意味で用いられており、また頻度は少ないもののMHでも見られる。よって遅い時期の語法として確定できる。

#### 4 F. Bush の研究の再検討

ルツ記にはSBHとLBHのそれぞれの特徴がみられることが確認できた。この事実からBushは次のように結論付けた。

1. ルツ記の著者<sup>35</sup>は捕囚前の遅い時期から捕囚後の早い時期に位置づけられる<sup>36</sup>
2. ルツ記の著者はSBHを使おうと努力しつつも、自分の時代のことばを僅かながら使う結果となった

筆者はこれらのBushの見解を支持しない。なぜならば、ルツ記の著者を捕囚前の遅い時期から捕囚後の早い時期に位置づけなくともSBHとLBHがテキストに混在していることは説明できるからである。池田潤(2002: 2)では、SBHは捕囚中も使われており、そしてLBHは捕囚後に使われていたことが示されている。しかし、LBHの時代でも書き言葉としてSBHが使われていたと考えても不自然ではないであろう。たとえSBHが日常的に書かれていなかったとしても、当時の人々がSBHの語彙や文法的特徴を知っていたと考えることは可能であろう<sup>37</sup>。したがって、筆者はルツ記

<sup>35</sup>Bushはルツ記のもととなった資料の存在を考慮に入れていないようである。また、彼はルツ記の著者の匿名性を説明しつつ一人の著者を想定しているようである。“The writer never refers to himself (or herself?) in any way whatsoever, the author as a historical person we can say nothing, apart (perhaps) from some general indication of the date of writing ...” Bush (1996: 18).

<sup>36</sup>やや詳しく述べると、捕囚期中のエレミヤ書やエゼキエル書よりも早い時代。

<sup>37</sup>C. Rabinは、紀元前586年のエルサレム陥落、つまりバビロン捕囚まで400年間使われたヘブライ語をClassical Hebrew (CH)と呼んだ。彼の言うCHとは本稿で言うSBHのことである。彼によると、CHは民衆によって理解されていたとしても教育を通して習得される書きことばであった。そのような教育を受けたのは主に社会のエリートである(Rabin (1973: 33-34))。SBHを自由に使うルツ記の著者が社会のエリートであったと考えても不自然ではないだろう。

の著者<sup>38</sup>はLBHの時代に位置づけられると考える<sup>39</sup>。

後の節で述べるが、ルツ記にはSBHでもLBHでもないと思われる言語的特徴も見られる。筆者はこのSBHでもLBHでもないことばの存在をルツ記の著者による文学的潤色ととらえることを提案したい<sup>40</sup>。その根拠として、まずBushが成立時期を推定する上で根拠とした言語的特徴の中に時代差だけでは割り切れない項目もあるということを示したい(4.1, 4.2)。また、Bushが成立年代推定の論拠として扱わなかった言語的特徴を文学的潤色という観点から論じてみたい(4.3, 4.4)<sup>41</sup>。

#### 4.1 一人称独立代名詞についての再考察

Kutscher (1982: 30, 82) や上に示したBushの研究で示されているとおり、一人称独立代名詞は時代差をはっきりと示す項目として挙げるができる。しかし筆者は、外国の登場人物に何かを発言させるとき、珍しいことばを話させて異国情緒を演出したというKutscherの指摘から、ルツ記に出てくる人物の発言にも、時代差以外の何かを示すものがあるかも知れないという考えをもった。なぜならば、ルツ記には、イスラエル人とモアブ人が登場しているからである。

Rendsburg (1990: 142-143) は、地理学的な考察が有効か否かは疑問の余地があるとしながらも、次のことを指摘する。すなわち、BHでは *ʔānōkî* と *ʔānî* の両方が見られるが、*ʔānōkî* と同族のものはイスラエルの周辺全方位、つまり南西はエジプト語、東はモアブ語、そして北はフェニキア語で見られる。そして *ʔānî* の同族はエブラ語・アモリ語・アラム語(および南セム語の地域) で使われている。

ルツ記で誰がどの一人称独立代名詞を口にしているかを見ると、以下の

<sup>38</sup>筆者はBushの「結論」は支持しなかったが、ルツ記の著者に関する見解と資料に関する彼の見解(注35参照)は支持している。それだけでなく、SBHとLBHが混在している様子を詳細に提示した彼のデータそのものも支持する。

<sup>39</sup>Gordis (1974: 245) では、ルツ記に早い時代と遅い時代のヘブライ語(early and late Hebrew)が見られることについて次のように述べられている。つまり、物語の背景に合わせるために遅い時代の著者が擬古体を使った。しかし、本稿では擬古体とそれ以外の潤色についても論じている。

<sup>40</sup>言語とは別に、左近淑(1992)ではルツ記に囲い込みや交差法など緻密な文学構造があることが指摘されている。緻密な文学構造を駆使する著者が、物語に何らかの潤色を施すことは想像に難くないと考えられる。

<sup>41</sup>4.3, 4.4に挙げる言語的特徴は、SBHでもLBHでもないものと思われる。

表のようになる。

		<i>ʔānî</i>	<i>ʔānōkî</i>
モアブ人	ルツ	0	3
イスラエル人	ナオミ	1	0
	ボアズ	1	3
	匿名人物	0	1

そもそも一人称独立代名詞は出現数が少ないので断言はできないが、次のような傾向が見られる。ルツ記の中のイスラエル人それぞれを見てみると、どちらか一方の一人称独立代名詞しか口にしない場合もあるが、イスラエル人全体として見てみると、どちらの一人称独立代名詞も使われている。それに対して、モアブ人であるルツが *ʔānōkî* しか口にしていないことは注目に値する。筆者は、この一人称独立代名詞は地域差を意識した潤色の可能性があるということを目指したいと思う。

#### 4.2 二・三人称女性複数形についての再考察<sup>42</sup>

ルツ記には二・三人称女性複数形が男性複数形によって代用されているように見える例が散見される<sup>43</sup>。Bush は Rendsburg の説を受けて、これを両性共用の双数形として扱った<sup>44</sup>。一方 Joüon は、この現象は特に遅い時代の書に多いと主張する。その例として Ru 1:8 を挙げた。さらに、独立人称代名詞ではこの種の代用は非常に稀であるが、確実な例の一つとして Ru 1:22 を挙げた。

これらとは別に、書きことばと話しことばの違いに注目した説明もある。Gesenius は女性複数形の男性複数形による代用を話しことばが文学作品に入り込んできたものとして説明し、その例として Ru 1:8 以下を挙げ

<sup>42</sup> 女性形全般の男性形による代用について、Slonim (1943) の研究があるが、その研究では古い時代にも新しい時代にも男性形による代用が多くあることが示されている。彼の研究の目的は、性の不一致の最終的な説明を提案するものではなく、典型的な例を通して女性形の男性形による代用が起こっていることを明らかにすることである (Slonim (1943: 301))。ちなみに彼は、サマリア五書では、性の不一致を修正して、一致させている例があることを示している (Slonim (1943: 297))。

<sup>43</sup> 1:8(x2), 9, 11, 13, 19, 22。このリストに 4:11 の例も加えるべきである。

<sup>44</sup> Rendsburg は、この両性共用の双数形は遅い時代の書にも時々出てくると指摘する。しかし、早い時代の書により多く出てきていることから、これを SBH の特徴としている (Rendsburg (1980: 77))。

た<sup>45</sup>。ここでは、この Gesenius の説明に着目し、ルツ記の問題の箇所を会話文と地の文に分けて再検討してみたい。太字部分は人称接尾辞がついた前置詞や動詞、そして人称代名詞を示す。「\*」印は、女性形をとっていない形を示す。

1:8 *yaʕāšeh<sup>h</sup> yhw<sup>h</sup> ʕimmākem\* ʕesed kaʕāšer ʕāšitem\* ʕim-hammētīm wəʕimmādīt*

「ヤハウエが貴方たちに\*慈愛をしめして下さいますように。貴方たち\*がかの死者たちと私にしてくれたように」(会話文)

1:9 *yittēn yhw<sup>h</sup> lākem\* ... wattiššaḡ lāhen*

「ヤハウエが貴方たち\*に...与えて下さいますように。」そして彼女は彼女たちに口付けをした。(前半《原文の...まで》は会話文。)

1:11 *wəhāyū lākem\* laʕānāšīm*

「...彼らが貴方たち\*の夫となったとしても」(会話文)

1:13 *kī-mar-lī məʕōd mikkem\**

「なぜならば私は貴方たち\*よりも辛いのです」(会話文)

1:19 *wattēlaknā<sup>h</sup> štēhem\* ... wattēhōm kol-hāʕīr ʕālēhen*

そして二人は\*歩んだ...彼女たちのことで町は騒然となった。(地の文)

1:22 *wəhēommā<sup>h</sup>\* bāʕū bêt lehem*

...そして彼らは\*ベツレヘムに入った。(地の文)

4:11 *kərahēl ūkālēʕā<sup>h</sup> ʕāšer bānū štēhem\* ʕet-bêt yiśrāʕēl*

「...イスラエルの家を建てた二人\* ラケルとレア のように...」(会話文)<sup>46</sup>

上に挙げたテキストの中で、人称接尾辞や人称代名詞 10 例のうち、複数の女性を男性複数形で指している例は 8 つあり、そのうち会話文中に出現している例は 6 つである。このように、問題となる形態は、ほとんどが

<sup>45</sup>Kautzsch (1910: 440).

<sup>46</sup>この文は町の人々のナオミへのことばではある。しかし、これは賛歌であるので上の会話文とは性格が異なる可能性がある。

会話文に出現しているため、話しことばの特徴として扱うことも可能であろう<sup>47</sup>。ルツ記の著者は、物語の登場人物が生き生きとお互いに語りかける様子を伝えるために、話しことばの特徴を潤色のひとつとして物語に加えたのではないだろうか。

#### 4.3 一人称単数形と同形の二人称女性単数形について

Ru 3:3, 4 には、文脈上二人称女性単数形が期待される動詞の語末にヨッドが付き、一人称単数形と同じ形になった動詞が出現している。そのため、聖書子音本文<sup>48</sup>の欄外には、それを二人称女性形に読み替えるよう提案されている<sup>49</sup>。この形態について、Bush はふれていない。

3:3 ...wəśamt śimlōtēk<sup>50</sup> ʾālayik wəyārādī (= K<sup>51</sup>; Q = wəyārādī)  
haggōren ...

...晴れ着をまとめて、麦打ち場へ下っていきなさい。

3:4 ...wəgillīt margəlōtāyw wəšākābtī (= K; Q = wəšākābt) ...

...彼の足元をめぐって横たわりなさい。

Joüon (1996: 132-133) は、この形態を二人称女性単数独立代名詞 \*ʾatti > \*ʾattə > ʾatt の類推から古形だと述べ、サマリア五書<sup>52</sup>では一貫してこの古い-ti が保持されていることを指摘する。また Kutscher は、間違いなく EBH の特徴を反映する Jdg 5:7 のデボラの歌にもこの形態が出現していることを指摘した<sup>53</sup>。このことから遅い時期に書かれたエレミヤ書とエゼ

<sup>47</sup> 聖書ヘブライ語からは時代が大きくかけ離れるが、現代ヘブライ語の日常語において人称代名詞、再帰代名詞の女性複数形を通常男性形で代用するという事実も参考になる(池田潤(1999: 64-67) 参照)。

<sup>48</sup> これを「ケティブ」という。

<sup>49</sup> このマソラによる読み替えを「ケレ」という。一般に、ケティブが古形を反映しているときにはケレが「新しい」用法に従うという。Kutscher (1982: 40)。

<sup>50</sup> ケレとして śimlōtayik が提案されているが、本論には関係がないので省略した。

<sup>51</sup> K と Q はそれぞれ、ケティブとケレを意味する。

<sup>52</sup> サマリア教団が伝える五書のこと。紀元前 3-2 世紀ごろにサマリア人共同体が成立したと考えられている。サマリア教団は 39 の書を含むヘブライ語聖書とは、律法、つまり五書だけを共有している。『旧約新約聖書大事典』 pp. 519-520 参照。

<sup>53</sup> この箇所には読み替えの提案として二人称女性単数形が欄外に記されていない。しかし、Kutscher は、デボラの歌が早い時期の聖書の詩文であり、確実にヘブライ語の古い段階を反映しているという理由から、問題の動詞を二人称女性単数形の古形だとする。また、デボラの歌のこの箇所ではアラム語の影響は除外されると述べる。彼は二人称女

キエル書にも出現するこの形態をアラム語の影響を考慮に入れながらも archaism だと述べた<sup>54</sup>。

サムリヤ五書は、ヘブライ語聖書よりも、LBH の特徴である完全表記をより多く使い、古い形態が姿を消す傾向にあることが指摘されている<sup>55</sup>。また、その成立が紀元前2～1世紀ごろのハスモン王朝の頃だということも指摘されている<sup>56</sup>。さらに死海文書のヘブライ語でもこの形態を見出すことができるという<sup>57</sup>。ケティブにヨッドつきの二人称女性単数形が記され、ケレに通常の形態が提案されているものを筆者が検索したところ、ルツ記のこの箇所以外では、エレミヤ書<sup>58</sup>とエゼキエル書<sup>59</sup>に現れていることが分かった。Kutscher の指摘によると、エレミヤ書とエゼキエル書はアラム語の影響のある時代に書かれた<sup>60</sup>。以上のことから、ルツ記に見られるこの形態は archaism ではなくエレミヤ書とエゼキエル書の頃のアラム語の影響を受けたものと考えられる。

このように、ヨッドの付いた形態は archaism と見ることも、LBH や死海文書の書かれた頃のアラム語の影響と関係づけることも可能である。古い特徴とも LBH の特徴とも解釈できるので Bush はこれを判断材料に用いなかったのではないだろうか。

性単数形の古い形態とされるものが、なぜ一旦ヨッドを失い、アラム語の影響を受けた後にヨッドが復活したのかという疑問を持ち、次のような仮説を立てた。それは、問題となる二人称女性単数完了形は EBH において存在していたが、SBH で通常の(つまりヨッドのない)形態になり、さらにアラム語の影響を受けて SBH が変容し始めたときに再び一人称単数形と同形になった、という仮説である。ヨッドつきの形態は Standard Aramaic において生き残っており、事実、アラム語の影響が特に強かった死海文書のヘブライ語ではこの形態を見出すことができるという (Kutscher (1982: 38-39))。

しかし、この箇所は子音本文どおり一人称単数形に読んで不自然な読みにはならない。また二人称女性形にとらなくてはならない理由がないと思われる。したがって筆者は Jdg 5:7 の問題となる動詞を子音本文どおり一人称単数ととり、この箇所をもとに二人称女性形を古い形態みなす根拠とすることは差し控えたいと思う。ちなみに、この箇所は、翻訳によって人称のとらえ方が異なる。一例を挙げれば、King James Version・鈴木佳秀 (1998)・新共同訳・フランス語訳聖書 (Louis Segond)・ドイツ語訳聖書 (LutherBibel (1912), The Revised LutherBibel (1984)) では一人称に、口語訳・フランス語訳・Revised Standard Version では二人称、Brenton による LXX の英訳では三人称ととらえている。

<sup>54</sup> Kutscher (1982: 38-39).

<sup>55</sup> Kutscher (1982: 108).

<sup>56</sup> 『旧約新約 聖書大事典』 p. 520, Coggins (1975: 215-225).

<sup>57</sup> Kutscher (1982: 38-39).

<sup>58</sup> Jer 2:33, 3:4, 5, 4:19, 22:23, 31:21, 46:11.

<sup>59</sup> Ezek 16:13, 18, 22, 31, 43, 47, 51.

<sup>60</sup> Kutscher (1982: 38-39).



archaism が LBH の頃のアラム語の影響かの判断を保留して、この問題を潤色という角度から見てみよう。3:3, 4 に出てくるこの形態は、いずれもイスラエル人のナオミがモアブ人のルツに語りかける会話文に出現している。archaism ととらえるのなら、LBH の時代の著者が士師の時代に合わせるために潤色したと解釈することが可能である。一方、LBH の時代のアラム語の影響だとしたら、これを異国情緒を醸し出す潤色と考えることができる<sup>61</sup>。ナオミのことはに貫してこの形態が現れないのは、ルツ記の著者がイスラエルの地に戻ってきたナオミに自分の国のことを話させながらも、10年間の外国での生活の影響を、彼女のことばの中に表現したためと解釈することもできるだろう。

#### 4.4 paragodic nun について

paragodic nun とは、未完了の二人称女性単数形、二人称男性複数形、三人称男性複数形の語末に添加される *n* である。ルツ記では 2:8, 9(x2), 21, 3:4, 18 でみられる。Bush (1996) の注解部分においてこの形態は archaism として扱われている<sup>62</sup>。しかし、成立時期を推定する上では論拠として用いられていない。

この形態は、Jouion (1996: 136-138) によると、ウガリト語・アラビア語・アラム語にも見出される。この形態が出現する原因として、テキストの古さ・擬古化・アラム語の影響・韻律が考えられている<sup>63</sup>。また、比較的古い時代の本文にしばしば見られ、遅い時代の書には少ない<sup>64</sup>。

聖書アラム語では早い時期のアラム語一般と同じく直説法ではたいてい語末に *n* が添加されている<sup>65</sup>。しかし、意味が指示形 (jussive) を要求するときには *n* が添加されない<sup>66</sup>。意味が指示形を要求するとき *n* が添加されている場合は、古い時代の名残だと考えることができる。一方、特に意

<sup>61</sup>LBH の中で異国情緒を出そうとすると、アラム語を持ち出す方法が考えられる。モアブ語とアラム語は異なるが、ナオミの言葉に現れるこのアラム語的形態を異国情緒を醸し出す潤色と考えたい。

<sup>62</sup>Bush (1996: 120).

<sup>63</sup>ibid.

<sup>64</sup>MH にはこの形態は残っていない (Kutscher (1982: 40))。

<sup>65</sup>Jouion (1996: 137). 聖書アラム語は、エズラ書やダニエル書の一部にもみることができる。したがって、アラム語では SBH の時代にも LBH の時代にも直説法では *n* が付いていたことになる。

<sup>66</sup>ibid.

味なく機械的に添加されている *n* はアラム語との関わりが考えられる。

ここでルツ記に出てくる paragogic nun を検証してみよう。

- (1) 2:8 **tiḏbāqîm** *ʕim naʕārōtāy* 「...私の召使いたちと一緒にいなさい。」
- (2) 2:9a *ʕênayik baššāde<sup>h</sup> ʔāšer-iqšōrûn* 「...彼らが落穂拾いする畑を見なさい。」
- (3) 2:9b **yišʔābûn** *hannəʕārîm* 「...若者たちの汲んだ...」
- (4) 2:21 *ʕim-hannəʕārîm ʔāšer-lî* **tiḏbāqîm** 「私の召使いと一緒にいなさい」
- (5) 3:4 *yaggîd lāk ʔēt ʔāšer taʕāšîm* 「彼はあなたがすることを教えてくれるでしょう」
- (6) 3:18 *ʕad ʔāšer tēdʕîm* 「...あなたが分かるまで...」

ルツ記の paragogic nun の出現箇所全てに共通しているのは会話文に出現しているということである。(1) から (4) はボアズからルツへの語りかけで、(5) と (6) はナオミからルツへの語りかけである。(1) と (4) は指示(命令)を表わしていることが分かる。したがって、これら二つの例は古い形態ととらえることができる。(5) と (6) は、上で述べた一人称単数形と同形の二人称女性単数形の場合と同様の解釈ができる。(2) と (3) は特に意味がなく機械的につけられている印象があり、アラム語の影響とも考えられる。しかし、それらは物語中では外国との関わりをもたないボアズの発言であるので、この2つの例は擬古化の可能性が高い。

既に述べたように、比較的遅い時期に成立した書には paragogic nun はあまり出現しない。しかし、LBHの時代に成立したと考えられる規模の小さなルツ記に paragogic nun が高頻度で出現していることは注目に値する。ルツ記の著者が何らかの意図を持ってこの形態を用いたと考えるのが自然であろう。ルツ記は土師時代、つまり LBH の時代からみると昔の時代の出来事を物語っている。したがって、この形態を擬古体ととらえる方が自然である。ルツ記の著者が昔の時代に設定した物語の舞台にあわせて登場人物に擬古的なことばを話させて潤色したと考えることができるだろう。

## 5 結論

本稿ではルツ記の成立年代に関する諸研究を概観し、言語をもとにした研究がより説得力を持つことを示した。そして聖書ヘブライ語の時代差に着目した Bush の研究を紹介した。筆者は Bush の結論を支持せず、彼の挙げた項目の一部を別の角度から再検討した。その結果、彼が論拠として挙げた項目の中には時代差、地域差、媒体差が複雑に絡み合ったものもあることが明らかとなった。そして、そのような時代差や地域差、媒体差を LBH の時代のルツ記の著者が文学的潤色のために用いた可能性があることを指摘した。

### 【参考文献】

- Beattie, D.R.G. 1974 *The Book of Ruth as Evidence for Israelite Legal Practice*, *Vetus Testamentum* 24, no. 3, 251-267.
- Bush, F. 1996 *Ruth, Esther*, Word Biblical Commentary 9, Dallas, Texas: Word Books, Publisher.
- Campbell, E. F. 1975 *Ruth*, Anchor Bible 7, Garden City, NY: Doubleday.
- Coggins, R.J. 1980 『サマリヤ人とユダヤ人 サマリヤ人の宗教の起源再考』 渡辺省三・土岐健治訳, 教文館(原著 1975年)。
- Gordis, R. 1974 *Love, Marriage, and Business in the Book of Ruth: A Chapter in Hebrew Customary Law*, In H. Bream, R. Heim, and C. Moore (eds.), *A Light unto My Path: Old Testament Studies in Honor of Jacob M. Myers*, Philadelphia: Temple University Press, 241-264.
- Hurvitz, A. 1998 *Can Biblical Texts Be Dated Linguistically? Chronological Perspectives in the Historical Study of Old Testament*, *Supplements to Vetus Testamentum* 80, *Congress Volume Oslo 1998*, Leiden: Brill, 143-160.
- 池田晶 2002 「ルツ記研究 その成立時期をめぐる言語学的研究」 広島大学大学院社会科学部研究科修士論文。
- 池田潤 1999 『ヘブライ語のすすめ』 ミルトス。

- , — 2000a 「聖書ヘブライ語に見られる地域差について」『文藝言語研究言語篇』38 : 1-15.
- , — 2000b 「聖書ヘブライ語における言語変種：概観とケーススタディ」『京都産業大学国際言語科学研究所報』21 : 179-204.
- , — 2002 「ユダとイスラエル：列王記に見ることばのちがひ」『聖書学論集』34 : 1-21.
- Joüon, P. 1986 *Ruth: Commentaire philologique et exegetique*, Rome: Biblical Institute Press.
- , — 1996 *A Grammar of Biblical Hebrew*, translated by T. Muraoka, Second Reprint, Roma: Editrice Pontificio Istituto Biblico.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一(編) 1992 『言語学大辞典』第3巻, 三省堂.
- Kautzsch, E. 1910 *Gesenius' Hebrew Grammar*, translated by A. E. Cowley, Oxford: Clarendon.
- 旧約新約聖書大事典編集委員会 1989 『旧約新約 聖書大事典』教文館.
- Kutscher, E. Y. 1982 *A History of the Hebrew Language*, edited by R. Kutscher, Leiden: Brill.
- Morris, L. 1968 *Judge and Ruth*, Tyndale Old Testament Commentaries, Leicester: Inter-Varsity Press.
- Rabin, C. 1973 *A Short History of the Hebrew Language*, Jerusalem, Jewish Agency.
- Rendsburg, G. A. 1980 Late Biblical Hebrew and the Date of 'P', *The Journal of the Ancient Near Eastern Society of Columbia University* 12: 65-80.
- , — 1982 Dual Personal Pronouns and Dual Verbs in Hebrew, *The Jewish Quarterly Review* 73: 38-58.
- , — 1990 *Diglossia in Ancient Hebrew*, New Haven, American Oriental Society.

Rudolph, W. 1962 *Das Buch Ruth, Das Hohe Lied, Die Klagelieder*, Gütersloh: G. Mohn.

左近淑 1992 「ルツ記の文学構造と主題」『左近淑著作集 第一巻』教文館, 303-335.

Sasson, Jack M. 1989 *Ruth: A New Translation with a Philological Commentary and a Formalist-Folklorist Interpretation*, second edition, Worcester: JSOT Press.

Slonim, M.G. 1943 Masculine Predicates with Feminine Subjects in the Hebrew Bible, *Journal of Biblical Literature* 62: 297-302.

鈴木佳秀(訳) 1998 『旧約聖書 ヨシュア記 士師記』岩波書店.

Weiser, A. 1970 『旧約聖書緒論』小野寺幸也・時田光彦訳, 聖文舎.

Würthwein, E. 1969 *Die Fünf Megilloth*, Tübingen: Mohr.

Zenger, E. 1986 *Das Buch Ruth*, Zürich: Theologischer Verlag Zürich.

## **Dating and Literary Embellishment of the Book of Ruth**

Akira IKEDA

In the first section, various studies on dating of the book of Ruth were surveyed. And it was shown that the linguistic studies are more convincing. In the second section, the history of the Hebrew language was outlined to understand chronological division of Biblical Hebrew (BH). And in the third section, F. Bush's study in 1996, which compared the linguistic features of the book of Ruth with those of Standard BH and Late BH, was summarized. In the last section, I reexamined Bush's study and pointed out that some linguistic features that he treated as historical varieties of BH might involve other linguistic varieties such as regional dialects and diglossia. I also pointed out the possibility that the author of the book of Ruth used certain linguistic forms for literary embellishment to give archaic and/or exotic flavor to the story.

aikedas5@yahoo.co.jp